

## 人間 この未知なるもの

アレキシス・カレル  
渡部昇一 著

アレキシス・カレル  
『人間—この未知なるもの—』  
三笠書房

「人間科学 (Science of man)」という学術用語は、西洋の学問の歴史のなかでは、例えばヒュームの『人性論』やこれに影響を受けたフランス百科全書の学問分類のなかの science de l'homme にその起源を求めることができると、さらにはフランス・ペイコンが神学に対比して提起した「人間の研究」にまで遡ることもできよう。しかし、現在の我が国の「人間科学」に直接に影響を与えているのは、やはりフランス生まれでアメリカで活動したアレキシス・カレル (一八七三—一九四四) であろう。血管縫合と内臓移植の新しい方法を開発して一九二二年のノーベル医学・生理学賞を受賞したカレルは、一九三五年に『人間—この未知なるもの』(Man, the Unknown) を出版したが、これがだだちに十八カ国語に翻訳されて国際的なベストセラーとなった。彼がこの著書の中で新しい単一の科学としての「人間科学」の必要性を力説したことが、その後大きな

## 二十一世紀の人間科学(一)

Okuya Koichi

奥谷 浩一

な影響力をもつたのである。カレルの問題意識の出発点にあるのは、西洋文明が科学・技術の高度の発達にもかかわらず、その便利さのためにかえって人間の身体的・精神的・道徳的な弱体化をもたらしているのではないかという危機感である。こうした人間の状況は、科学者が人間をよく知らず、人間と人間を取り巻く生活環境の改善という目標を意図的に追求することもなく、たまたまの学問的関心から狭い専門分野だけをバラバラに追求することによって生じているのではないかとカレルは考える。したがって、人間そのものを意識的に研究の対象とすること、人間にかんする全体像をもつこと、人間とその環境の改善を科学の目標としてしっかりと掲げること、この全体的な目標に向けて科学のそれぞれの専門分野が意識的に分野を横断して協力しあうこと、そして人間を身体的・精神的に強化することがカレルの「人間科学」の目標であった。

カレルの思想には、優性思想や神秘主義への傾斜、歴史学と社会科学への不当な評価など、いくつかの問題点があったにせよ、科学の専門化・細分化から

生ずる弊害に警鐘を鳴らし、人間研究において分析だけでなく総合がもつ重要性を指摘し、人間研究を推進するための方法と組織の改善を提起したことなど、今日もなお傾聴すべき多くの問題提起が含まれていた。

このカレルの問題提起は、文化人類学者のラルフ・ギントンや社会学者のジョン・ギントンに継承されていたが、アメリカではその後行動主義心理学に端を発する行動主義的方法が人類学や社会学、人間関係学や社会学など浸透していき、いわゆる「行動科学」が一九五〇年代に確立されるにいたった。しかし、一九六二年に日本学術会議の長期研究調査委員会が「人間の科学」について初めて行ったシンポジウムが示すように、我が国にこの「行動科学」が移入された時に一般受けする通りの良い名称としてこれを「人間科学」と称して以来、我が国の「人間科学」にはある揺らぎと混乱が生ずることになった。「人間科学」の理解に大きな幅が生じ、カレルのような明確な課題意識をもつた「人間科学」から人間をもつばら自然科学的な方法で研究することが「人間科学」なのだという行動

科学的な理解にいたるまで、さまざまな考え方が登場するにいたったからである。

しかし、全国で第三番目に学部学科の名称として「人間科学」を掲げて設立された札幌学院大学人文学部の人間科学科は、その設立趣意書に「人間と人間社会・文化に対する、これまでの細分化され、断片化されたアプローチの限界性が強く意識されつつある現在、真に人間尊重の立場に立つ総合的な人間の科学とそれにもとづく教育システムの創造は、現代に生きる人文系・社会諸科学研究者の共同の責務である」と銘記されているように、カレルの考え方をより強く継承しているといえよう。「人間科学」とは人間を科学的に研究することだという単純な自然科学主義的理解からは、先に述べたカレルの問題提起の重要な部分がほとんど抜け落ちてしまっているからである。

それでは、「人間科学」にかんする理解の揺らぎと混乱という状況を踏まえながらも、「人間科学」が学生集めのたんなるファッションに終わらないためには、何が考えられなくてはならないであろうか。

(次号へと続く)

# 学生体験記

## 社会教育課題研究Ⅱ の調査実習を終えて

八月二十七日から三十一日までの四泊五日、「社会教育課題研究Ⅱ」の調査実習を美瑛町で行いました。美瑛町に着いてから、「町づくり」、「福祉」、「社会教育」、「教育」の四つのグループに分かれ、各々について調査しました。初めての調査実習ということもあり、事前に授業の中で下準備をしてはいましたが、いざ行くととなると、緊張と不安でいっぱいでした。



町を初めて訪れましたが、まずは目の前に広がる丘陵等の自然に魅了され、空も雲も普段見ているものと同じものとは思えないほどの綺麗さに感動しました。

二日目、午前中は町づくり関連事項の方、および財政運営関連事項の方のお話を聞きました。午後は班ごとに分かれての調査で、私は教育のグループでしたので美瑛小学校、美瑛中学校、美瑛の町にあるどんぐり保育所へ行き、お話を聞かせてもらいました。

三日目も午前中は、社会教育関連事項の方と福祉政策関連事項の方のお話を聞き、午後は班ごとに行動しました。この時は僻地複式学級の小学校を訪問・見学しました。

四日目は、美瑛高校関連事項として、町の教育長さんと農業政策関連事項の方のお話を聞きました。午後は、全員で美瑛高校を訪ね、今の美瑛高校のおかれている状況、また、親・先生・生徒・地域の人の話し合う場としての四者協議会についての

話を聞きました。その後、また班に分かれて調査をしました。私は駅前の商店街の方に口頭でアンケート調査をおこないました。

初めての土地で一件一件お店を訪ねてインタビューすることの難しさ、コミュニケーションの難しさを実感しました。

最終日は、四日間で調べたことを報告するという中間報告会を役場の会議室を借りておこないました。美瑛町で学んだ四日間の成果を、お世話になった方々の前で報告するというのはとても緊張しましたが、現地に行つて調査し、多くのことを学び、知識を得たことを私たちがなりに報告することができたのは、良い経験になったと思っております。

実習を終えてみて、実際にこの目で美瑛町の地域社会・現状にふれ、また、生の地域の人の声を聞くこともでき、自分自身考えさせられました。とても身の濃い五日間でした。

(人間科学科三年 堀合 紘子)

### 教育実習を終えて

母校の中学校で三週間の教育実習を終えました。毎日必死で、三週間は本当にあつという

間に終わってしまいました。私は二年年の英語を担当し、ホームルームは二年A組を担当しました。

私が担当した授業は約十時間です。時間数としては少ないかもしれませんが、その分毎回の授業を大切にしました。一時間で何を伝えたいのか、どこが大切なのか、生徒が積極的に活動する場面はあるのか、など多くのことを考えながら指導案を作り実践してきました。教科指導の先生に一時間毎にご指導いただいた、その内容をしっかりと書きとめ、いつもノートを見返して次の授業を改善しようと必至でした。初めのうちは「説明の多い授業」でしたが、「生徒に実践させながら覚えさせる」という方法に変えてゆきました。私の中で一番苦労したところですが、どうしても、「あれもこれも」と説明ばかりでしたが、それでは生徒の活動時間が短くなってしまいます。たくさん悩みましたが、時間は過ぎてゆくの落ち込んでいた時間はありませんでした。落ち込む時間があるなら、その事をどう変えるかという時間になりました。反省すること、気持ちを切り替えることが大切でした。

授業の他にも中体連、中間テスト、また二年年の宿泊研修にも参加させていただきました。どの行事も非常に懐かしく感じました。部活動は私が中学生時代に所属していたバドミントン部に参加しました。二年生の生徒もたくさんいて、私自身が忙しくなり部活に顔を出せなくなつても「先生、今日来る？」と声を掛けてくれました。もつと参加できる時間があつたらと辛かったです。

宿泊研修に関してはなかなか体験できることではないと思います。非常に貴重な時間でした。一泊二日、内容が盛りだくさんで、私自身も楽しんでいました。生徒と一日中一緒にいて、生徒の新たな一面を見ることができて非常によい経験となりました。最初は先生としても中途半端で、しかし生徒ではなくという思いがあり先生方に迷惑をかけてしまうのではと不安にも思っていました。先生方は非常に優しく有意義な二日間を送れました。

この三週間、本当に生徒に助けられました。田舎の中学校ということもあり、顔を知っている生徒もいて話も弾みました。授業や普段の学校生活におい

て、生徒と一緒にいる時間は本

当に楽しく、ただ一緒にいるだけで毎日の疲れは感じませんでした。最終日の研究授業が始まる前の休み時間に「先生頑張つてね!!」と励ましてくれる生徒がいて、本当に勇気付けられました。研究授業の最中もいつも以上に生徒は頑張つて発言をしてくれ、私を助けようとしてくれていたことが本当によく分かりました。授業はなんとか無事に終わり、その瞬間、「終わつた」とホツとした気持ちと「これで最後」という気持ちがありました。最後のホームルームでは生徒への感謝の気持ちから涙が出てきました。そして生徒から素敵なメッセージカードと手紙を貰いました。

ホームルーム担任の先生や教科担当の先生、周りの先生方には本当に感謝しています。授業の準備をしている時にも言葉をかけて頂いたりもしました。教育実習で「教師」という職業に本当に魅力を感じました。来年度教育実習を控えている方々は、事前準備をしっかりと、どうぞ実習を楽しんで下さい。そして生徒とたくさん触れ合って素敵な思い出を作して下さい。先生方や生徒たちは本当に温か

いです。

(英語英米文学科四年

金川 紀子)

### 地域の子ども連携 マネジメント実習

この授業は、こども発達学科ならではの授業だったと思います。教師を目指している私たちにとって、子どもと接する授業というのは素晴らしい経験でした。

授業の内容は、地域の子どもたちを学校に呼び、私たち学生が企画したことをその子どもたちに体験させるというものです。今回は「不思議体験をしよう」というテーマで、スライム作りと牛乳パックを使ったパン作りを行いました。両企画とも成功し、子どもたちも楽しそうにやっていました。

この体験以外にもオープンニングとしてゲームを行いました。私はその司会をしました。その中でルパン三世に仮装をして子どもたちを笑わせることもでき、このことが実習を始める前の緊張感を解すこととなったと思います。

この授業の中で何よりも嬉しかったことは、子どもたちが笑顔でとても楽しんでくれたこと

です。子どもたちだけではなく、一緒に来てくれた保護者の方々もその姿を見て喜んでくれたことがとても嬉しかったです。

この授業は一人ひとりがしっかりと自分の仕事をし、みんな協力しなければ成功することはできないものだったと思います。みんなが協力したからこそ大成功という形で終えることができたと思います。自分たちが何をすれば子どもたちが楽しみ、また良い経験ができるのかということを考えるのは非常に難しいことでした。しかし、これ乗り越えて成功したときの達成感というのはとてもよかったです。

この授業を通して教師になるのは大変なことだと思いつつも、教師になりたいという気持ちがさらに強くなりました。こ



のような機会がもつとあればいいなと思います。もつと子どもと接する機会を増やし、経験を積みたと思います。教師を目指す者にとって、この授業はとてもいい経験になり、また、とてもためになる授業でした。

(こども発達学科二年

若山 嵩洋)

### 応用実習Cを履修して

応用実習Cとは、九ヶ所の病院・機関・学校への見学と、夏期長期休暇中に福祉関係施設に五日間の体験実習をさせて頂く科目です。私が実習をさせて頂いている施設は『北海道クリスチャンセンター』家庭福祉相談室(以下、相談室)というところです。五日間の体験実習ではなく、一年間のボランティアアワーとして、発達援助プログラムに現在も参加させて頂いています。実はこの相談室への実習を希望する学生が多かったため、担当の先生からボランティアアワーとして一年間参加することで実習とみなす、という話を聞き、五日間より一年間参加するのが良いと思います。相談室は『児童デイサービス事業』として活動しています。

相談室で開室している発達援助グループが五つあり、就園前の幼児が通うグループが二つ、幼稚園や保育園と並行して通うグループが三つです。私が参加しているグループは就園前の幼児がいるグループで、T君という男児の担当を持たせて頂いています。最初は、お互い緊張しているのが伝わりあっているような状態で、深い関係をもつまで時間がかかりました。そのような状態を見た指導者の方が「貴方が遊びを楽しまないと、彼も安心感を持ってないし楽しめないよ」と言われ、それからは一緒に遊ぶときに私が楽しむようにしたら、自然とT君も笑顔が増え遊びを楽しむようになってきました。今ではラポール(信頼関係)を築くことができています。他のワーカーさんの動きから学ぶことも多くあり、常に新しい発見の連続です。また私の実習は終わりましたが、最後までT君の発達援助に全力で携わっていきたくと思っています。そして来年以降も、相談室で発達援助プログラムに関わり、障害を抱えた子どもと向き合いたいと考えています。

(臨床心理学科三年

袴田 愛)

二〇〇七年度

## 人文学部夏期集中講義

二〇〇七年度の人文学部夏期集中講義は、人間科学科で二科目、英語英米文学科で一科目、臨床心理学科で四科目、こども発達学科で四科目が開講された。その中から、全学科に開講されている「人間論特殊講義」について、受講生の感想を交えて報告する。

今年で第六回目となる公開講座「人間論特殊講義」が七月三十日から八月四日の六日間にわたって開講された。「ともに生きる知恵を探求する」という総合テーマのもとで、本学の社会学を中心とした関連する諸領域の教員六人が講師をつとめた。

現在進行しつつある社会の構造的な変容は、私たちの生の営みに対してさまざまな影響を及ぼしつつある。経済のグローバル化や合理主義の徹底、個人人の選択可能性の増大とその裏返しとしての責任の個人化等々といった状況下において、私たちの生きる社会においては、旧来の方法によっては人々の連帯を維持していくことが困難なもの

となりつつある。このような認識とそれに応じた解決策の模索という課題設定は、広く社会学一般に共有されるものといえるが、同時にそれは現代社会を生

化と個人の自己選択（湯本誠）、「社会的環境としての学校」（富田充保）、「現代社会における家族と自己」（木戸功）。前半の三日間は、現代の社会変動との関わりにおいて生じてきたさまざまな社会問題のなかでも、とりわけ自分とは異なる他者をいかに理解するかという問題がとりあげられ考察された。また、後半の三日間ではそれらをふまえて、職場、学校、家族という私たちになじみ深い生活領域ごとに、現在生じつつある問題とその解決への道筋が考察された。

であるが、総じて講師はそれぞれの専門的な立場から話題提供を行い、老若男女さまざまな受講生とともにそれぞれの問題について考えるという、受講生からすれば主体的に取り組む姿勢が求められた講座であったように思われる。この総合テーマゆえのことであろう。また、いわゆるリレー形式で行われた講義は、筆者自身もそう感じたのであるが、ふだんあまり接することのない教員の話に触れる機会にもなり、このことは人間科学科の受講生にとってもよい刺激となつたようだ。受講生には毎回の授業に対するコメントに加えて、最終日には六日間をふりかえつての感想を提出してもらった。そのうちのいくつかを抜粋して紹介したい。

「この六日間毎日家に帰って、親とその日の講義の内容について一緒に話し合うことができた」（英米三年）

「六回の講座を通して考えの幅が広がった。開かれた大学として一般向けにも開放してくれてありがたくなる」（一般）

「様々な専門分野の話を一一般の方々も交えて聴くことができこの講座はいいものだと思

このようななかで、それでも私たちが社会に生きる存在としての人間であることを前提とするならば、私たちはさまざまな他者とともに生きていかななくてはならないはずである。さまざまな他者と「ともに生きる知恵」をめぐる展開されたこの講座は、こうした現代社会を生き抜いていく私たちの知恵と方法を受講者とともに考えるという、そのような意図のもとで企画されたものである。全六回の講座においてとりあげられた各テーマは以下の通りである。

「コミュニケーション社会から市場経済社会へ」（内田司）、「社会的格差と貧困」（松本伊智朗）、「社会的排除とマイノリティ」（井上芳保）「職場社会の変

であるが、総じて講師はそれぞれの専門的な立場から話題提供を行い、老若男女さまざまな受講生とともにそれぞれの問題について考えるという、受講生からすれば主体的に取り組む姿勢が求められた講座であったように思われる。この総合テーマゆえのことであろう。また、いわゆるリレー形式で行われた講義は、筆者自身もそう感じたのであるが、ふだんあまり接することのない教員の話に触れる機会にもなり、このことは人間科学科の受講生にとってもよい刺激となつたようだ。受講生には毎回の授業に対するコメントに加えて、最終日には六日間をふりかえつての感想を提出してもらった。そのうちのいくつかを抜粋して紹介したい。

「この六日間毎日家に帰って、親とその日の講義の内容について一緒に話し合うことができた」（英米三年）

「六回の講座を通して考えの幅が広がった。開かれた大学として一般向けにも開放してくれてありがたくなる」（一般）

「様々な専門分野の話を一一般の方々も交えて聴くことができこの講座はいいものだと思

「今年をはじめて夏期集中講義に参加しました。ひとつの主題にそつて様々な先生が様々な領域や視点から行う講義は興味深いものが多く、自分にとって本当によい勉強になったなと思います」（人間三年）

「この集中講義を受けて、自分がどんな分野に興味があるのかということも、発見、再認識できた」（人間三年）

台風の影響による天候不順と蒸し暑さのなかではあったが、講師および受講生「ともに」有意義な六日間であったといえよう。（木戸 功）



## 人文学部合同講演会

## 感情表出に見る

## 日本人の特徴

— サムライ・ジャパン —

前期の人文学部合同後援会が、六月二十二日(金)にSGUホールにて開催された。岩田昇氏(広島国際大学教授)を講師に、「感情表出に見る日本人の特徴—サムライ・ジャパン—」をテーマにお話いただいた。

人文学部一年生が対象であったが、上級年次の学生、大学院生の参加もあり三二〇名ほどが聴講した。

講演は講師の研究テーマでもある、心理測定の国際比較を大学生生活を開始したばかりの一年生向けにしていたのだというものであった。質問紙法を用いて測定した場合の国際比較で、抑うつ得点が日本人はアメリカのサンプルに比して高いという結果に注目して、「なぜ日本人の抑うつ得点が高いのか、日本人労働者はアメリカ人労働者よりも抑うつレベルが高いのか?」といった疑問を検討するために、日米のサンプルを用いた詳細な研究をスライドを用いながら紹介され、日本人はポジティブな感情を表出しないために、うつ傾向が高いと判定されてしまうことを説明された。

また、どうすればポジティブ

になれるのかという視点から、大学生の日常経験するストレスサーについての調査資料も紹介しつつ、ご自身のアメリカでの生活体験、学生との体験などを交えながら、具体的なストレス対処の方法についても話された。講演後実施されたアンケートでも、「ストレスは人生のスパイス」という言葉で、これからの学生生活に頑張れそうな気がしました。「今回の講演を聞いて、大学生生活をもっと楽しんで有意義に過ごしたいと思つた。」「非常に人間らしい内容であり、気分的に楽しかった。」などと概ね好評で、学生生活を開始して間もない学生を対象とした講演会にふさわしいものであった。

なお講演会終了後、臨床心理学研究科の院生を対象に研究の進め方についてのミニ講義と質疑応答も行っていた。院生諸君も大いに刺激を受けた様子だった。(田形 修一)



私は、七月二十九日から行

われたオールイングリッシュキャンプに参加しました。キャンプは三泊四日で、今年は二セコで開催され、二十一人が集まりました。最初は、みんな初対面で、お互いかなり緊張していましたが、四年生の先輩方がその場を盛り上げ、次第にみんな打ち解けるようになっていきました。そして、みんな最初は英語でコミュニケーションをとるのが、恥ずかしいというような感じでしたが、目を重ねるごとに、だんだんと英語で挨拶や、ゲームをするようになりました。

キャンプの内容はというと、一日目は簡単なレクリエーションから始まり、外でバーベキューをしてみんなで交流を深めました。その後、今年も参加してくれたグロース先生の息子のイアンさんなどから海外生活の話をお聞きしました。イアンさんはとても面白く、日本語もペラペラですぐに仲良くなりまし

た。

二日目は、朝の体操の変わりにはピリズブートキャンプをやつて少し汗を流してから、二セコに住んでいるオーストラリア人の話を聞きました。日本で暮らすことで苦労したことなど、とても興味深



三日目は、二セコの自然を体験しようということで、二セコアンヌプリに登りました。とっても険しく大変でしたが、とてもいい思い出になりました。そのあと温泉で疲れを流してから、バーベキューをして、花火をしました。

このように、この英語キャンプでは、普段の授業とは違い、遊びながら英語を学べるので、とてもいい体験です。しかも、解らない単語は、みんなて学べるようになっていて、楽しいついでに単語も覚えて帰れるというまさに一石二鳥なキャンプなのです。ですから、英語が苦手な人も是非参加してみたいかがでしょうか。

いお話が聞けました。昼からは、ペンションのテニスコートでテニスをしました。その日の夜は、Show & Tellという持参した写真などを英語で紹介するアクティビティをした後、外国のボードゲームをして遊びました。

最後になりましたが、キャンプを成功させるために様々な催しを考えてくださった諸先生方や、四年生の先輩方に心から感謝いたします。是非来年も参加したいです。

(英語英米文学科三年

杉西 宏太)

## 第二九回人文学部体育大会を終えて



六月十六日、およそ二ヶ月前から体育委員全員で準備をしてきた体育大会が、ようやく当日を迎えました。今回は、例年より競技数を減らし、バスケットボールとドッジボールの二種目を行い、その代わり男女別で競技をするなど、今までとは少し違う感じとなり、若干戸惑いながらもなんとか無事に間に合いました。当日は体育委員も学生のみなさんも、比較的時間通りに集合してくれたのでスムーズに開会式を行うことができました。

開会式が終わり、まずはバスケットボールが始まりました。始めはルール内容などの詳細が審判に伝わっていないなどのハプニングが起きましたが、先輩の助けを借りたりしてなんとか乗り切ることができました。

バスケットボールの次はドッジボールで、ドッジボールはそれほど大きな問題などは起こらず無事終えることができました。ただバスケットボールもドッジボールも、コートによつては進行状況が若干変わってしまったことや、クラスによつては待ち時間が長すぎ、暇になってしまうなどについての対策をもう少し考えるべきだったと思います。ただ、いざ始まってみると予想以上にみんな盛り上がりつつ来てドッジボールも全員が楽しく参加できていたと思うのでよかったです。

今回の体育大会を無事終えることができたのは、様々な方々や、学生のみなさんが進んで審判などの手伝いをしてくれたお陰です。ありがとうございました。

最後に二ヶ月間にわたって準備をしてくれた体育委員のみんな、本当にお疲れ様でした。

(人間科学科一年  
船橋 航)

## イギリス、エクセター大学で 半期海外留学がスタート

人文学部英語英米文学科、半期海外留学実施校に、エクセター大学(イギリス)が今年新たに加わった。エクセター大留学第一期生六名は、八月六日から現地での語学研修を開始している。大学が立地するエクセター市はロンドンから電車で二時間半のイングランド南西部デヴォン州の州都である。歴史的建造物が多く残るイギリスで最も古い街の一つで、中心街は賑わいと活気に満ちており、郊外には豊かな自然が広がる。イギリスで住みたい街のランキングで上位に位置づけられるというのもうなすける大変魅力的な地域である。大学のキャンパスは、中心街から徒歩約一五分の小高い丘の上にあり、緑に囲まれ大変美しい。このような環境の中、

札学生は前半の二ヶ月は自炊タイプの寮で、後半の三ヶ月はホームステイ先で生活する。

語学コースではレベル別に少人数クラスが編成され、「会話」「語彙」「文法」などの英語技能が総合的に鍛えられる。又、プレゼンテーションやディスカッションなど参加型の授業も行なわれ、コミュニケーションの手段として実際に使える英語力を身に付けることができる。さらに課外活動も盛んに行われている。小旅行、スポーツ観戦、ソング・ナイト、観劇といった活動を通して、イギリスの文化と歴史の理解が深まり、世界各国からの留学生との交友が広がるであろう。学生達が豊富な経験を積み、実践的英語力を身に付け、人間的にもひとまわり大きく成長して帰国する日を楽しみにしている。



(西 真木子)

## 二〇〇七年度前期末 学位記授与式 —新たに二名が卒業—

本年度の前期末学位記授与式(卒業式)が九月二十七日、本学G館(創立五〇周年記念館)で挙行された。全学で二四名の新たな学士と修士一名が誕生した。

人文学部では人間科学科から二名の卒業生を送り出した。

三月の卒業式と同様、学位記(卒業証書)は学部長より授与された。また、式後の卒業祝賀会はG館のレストラン文泉にて開催された。それまでの苦勞話や思い出話など、卒業生を囲みながら、学長をはじめ教員・職員の輪がいくつもできた。これで人文学部の学士号取得者は五、四三三名(人間科学科三、五九二名、英語英米文学科一、六二二名、臨床心理学科二一九名)となった。

留研を終えて

二十年目の里帰り

二〇〇六年度の一年間、国内留学研修の機会を与えて頂いた。滞在先は母校である北海道大学教育学部で、大学院を中退して大学教員になってから、二十年目の里帰りである。ただ、私を受け入れてくれた教育福祉研究グループとは共同研究を継続していたから、新鮮味は無い。学部には私が学生のころに若手の先生だった諸氏が何人か残っており、廊下で会ったときなど、松本君どう、勉強してる？ いくつになった？ などと声をかけられる。帰省したけど近所に口うるさい親類がたくさんいて落ち着かない、という気分である。

大学での日々は、これまでしてきた調査データを入力し分析する、たまっていた報告書や論文を書く、研究報告の準備をする、大学院のゼミに出席して文献の検討や討論をするといった、研究者としてはごく当たり前の地味な毎日であった。以前ロンドンの大学に滞在していたときは全てが新しく刺激的だったが、対照的である。講義の準備や会議などが無いせいか血圧がだいぶ下がり、医者からは正直な体ですわねと笑われた。一年間の研究テーマは、「子どもの貧困と社会的排除」である。私は大学生のときに、貧困の研究に関心をもった。大学院時代以降はその関心を下敷きにして、社会的不利を負う子どもの問題を研究テーマにすることになった。その一環として児童福祉施設の子どもの生活と進路の調査を続けていたこともあって、十年ほど前からは子ども虐待問題に深くかかわることになった。一方で貧困の研究自体は遅々と進まなかった。この出発点を、もう一度確認して勉強しなおそうというのが、研究テーマ設定の意図であった。

二十一年間でそれなりに問題関心が広がり、と深まりを持ったような気もするし、案外変わっていないような気もする。ここ数年、貧困と格差をめぐる社会的関心が高まっている。その時期に、もう一度ゆっくり考える時間を与えられたことは、貴重な経験であった。感謝したい。

(松本伊智朗)

2007(平成19)年度人文学部校務分掌

2007年4月1日

役職・委員会等の名称	学部枠	人間科学科	英語英米文学科	臨床心理学科	こども発達学科
学部長		奥谷			
大学院研究科長				○安岡	
学科長		◎湯本	宮町	☆滝沢	○小林
心理臨床センター長				井手	
人文学部教務委員会 (含 視聴覚・LL担当委員)	5	○奥田、松本	山添、○(グローズ)	田形	○鈴木
人文学部広報委員会 人文学部報編集委員 学院評論編集委員(全学) 人文学部WWW管理者	4	○舩田、木戸 (WWW、山越)	○坪井、(西)		○小出
人文学会幹事会		○松川	○川瀬	○伊藤	
全学教務委員会	1				鈴木
学生委員会	1	鶴丸			
進路支援委員会 (就職委員会(全学))	4	白杵、船津	西	○葛西	
学部入試委員会 (広報入試委員会(全学))	4	○新田	平体	佐野	○大瀬
図書委員会	1			橋本	
研究委員会	1	○松川			
電算機センター運営委員会			○ヒンクルマン		
国際交流委員会	1				○諸
国際交流センター所員			グローズ、西		
教職課程委員会	1	富田、工藤 工藤、富田、 (片桐)(小原)	○(櫻田)		(虎尾)
” (教育実習主担当)		笹岡			
国庫助成教授会連合					
学生相談室相談員 (総合教育センター)					
部門協議員		内田	○宮町、 (ヒンクルマン)		諸
各課協議員					
学長		●布施			
全学部長職			菅原(入試)		◎新國(図書館長)
全学委員長職					
大学協議員(学部・選挙)	2			滝沢	小林
大学協議員(センター選出)		◎内田、船津			
理事(選挙)		川合、酒井、杉山			
教員評議員(選挙)	1			☆滝沢	
アドミッションアドバイザー			○グローズ		
政策推進室					
留研			中村(前期) 岡崎(後期)	森(通年)	

備考 1. ○印は継続 2. ◎は3年目 3. ●は4年目 4. ☆は5年目  
5. 英語英米文学科の( )は、正規委員ではなく、学科独自に設けたサポート役 互助会 葛西

2007年度学部教員の  
人事・研究活動等  
(4/259/30)

◎海外研究出張

●白杵 勲 ○七年八月三日  
〜十四日 モンゴル「契丹時  
代城郭調査」

●酒井 恵真 ○七年八月十七  
日〜二十八日 ブラジル「科  
研費助成による「外国人集住  
地域における地域社会構造と  
地域住民生活の変容に関する  
総合的研究」

●諸 洪一 ○七年九月九日  
〜十一日 韓国「国会編集委  
員会ワークショップ報告及び  
資料調査」

●菅原 秀二 ○七年六月十七  
日〜二十二日 フランス「歴  
史的アーカイブスの多国間比  
較に関する研究」に関わるパ  
リでの研究会参加と史料調  
査

●滝沢 広忠 ○七年七月十四  
日〜二十二日 スペイン「第  
十五回世界ろう者会議」

●鶴丸 俊明 ○七年六月九日  
〜十七日 モンゴル「北ア  
ジアにおける後期旧石器時代  
成立過程の研究」で計画して  
いる発掘地の選定および打合  
せ

●鶴丸 俊明 ○七年九月八日  
〜二十三日 モンゴル「モン  
ゴル科学アカデミーとの共同  
発掘調査」

●中村 敦志 ○七年六月二十  
五日〜三十日 アメリカ「ア  
メリカ詩研究(資料収集)」

●西 真木子 ○七年八月四日  
〜十九日 イギリス「イギリ  
ス小説研究のための資料収  
集」

●橋本 忠行 ○七年七月二十  
日〜二十六日 アメリカ「調  
査研究・臨床実践の指導を受  
けるため」

●平体 由美 ○七年八月四日  
〜十三日 アメリカ「公衆衛  
生行政についての資料収集」

◎出版物

●白杵 勲(分担執筆)『東ア  
ジア考古学辞典』東京堂出版  
二〇〇七年六月 六一〇頁

二〇、〇〇〇円＋税

●白杵 勲(分担執筆)『北東  
アジア交流史研究』塙書房  
二〇〇七年二月 五四〇頁

二、〇〇〇円＋税

●平体 由美(単著)『連邦制と  
社会改革―20世紀初頭アメリ  
カ合衆国における児童労働規  
制』世界思想社 二〇〇七年  
六月三十日 二五六頁 三、  
五〇〇円＋税

●松本伊智朗(分担執筆)『現代  
の貧困と不平等 日本・アメ  
リカの現実と反貧困戦略』青  
木紀・杉村宏編著 明石書店  
二〇〇七年二月 三二七頁  
三、〇〇〇円

◎委嘱発令

●市川 啓子 札幌市子どもの  
権利条例検討会議委員(札幌  
市) ○七年八月〜答申作成ま  
で

●市川 啓子 北海道教育推進  
会議委員(北海道教育委員会) ○  
七年八月一日〜〇九年七月  
三十一日

●白杵 勲 機関誌『日本考  
古学』査読委員(日本考古学協  
会) ○七年四月〜〇八年三月

●白杵 勲 東京外国語大学  
アジアアフリカ言語文化研究  
所共同研究員(一般共同研究  
プロジェクト) ○七年四月〜  
十年三月

●奥谷 浩一 江別市廃棄物減  
量等推進審議会委員(江別市)  
○七年五月一日〜〇九年四月  
三十日

●菅原 秀二 ローターリー財団  
国際親善奨学金委員会委員長  
(ロータリー「二五二」地区) ○  
七年七月一日〜〇八年六月三  
十日

●富田 充保 北海道私立大学  
教職課程研究連絡協議会事務  
局長(同協議会) ○七年四月  
〜〇九年三月

●新田 雅子 平成十九年度地  
域部会地域福祉推進協議会委  
員(北海道社会福祉協議会)  
○七年十月〜〇九年三月

●松本伊智朗 日本子ども虐待  
防止学会評議員(同学会) ○  
七年十二月〜一〇年十二月

●松本伊智朗 北海道子どもの  
未来づくり審議会特別委員  
(児童虐待・いじめ防止に関す  
る部会)(北海道) ○七年六月  
〜〇七年十二月

◎研究助成

●白杵 勲 「北東アジア中世  
遺跡の考古学的研究」代表(文  
部科学省科学研究費 特別研  
究促進費) 九三〇万円

●白杵 勲 「契丹城郭の比較  
考古学・文化財学研究」代表  
(日本私立学校振興・共済事業  
団 学術研究振興資金) 八〇  
万円

●木戸 功・新田 雅子(共  
同研究)「後期高齢期の夫婦の  
み世帯における生活課題特性  
(Ⅱ)」(財団法人北海道高齢者  
問題研究協会 調査研究事  
業) 二八・四万円

●菅原 秀二(共同研究)「18世  
紀イギリス都市における市民  
的社交圏の形成」(文部科学省  
科学研究費 基盤研究(B)) 三  
八〇万円

●菅原 秀二(共同研究)「複合  
国家イギリスの社会変動と宗  
教に関する地域史的研究」(文  
部科学省科学研究費 基盤研  
究(B)) 五五〇万円

●新國三代(研究分担者)「社  
会調査史の博物館」としての  
リージョン拠点ブータアーカ  
イブの構築(平成十九年度科  
学研究費補助金) 三八〇万円

●平体 由美「連邦制と社会改  
革―20世紀初頭アメリカ合衆  
国における児童労働規制」(ア  
メリカ研究振興会出版助成)  
一〇〇万円

編集後記

大学では十月から後期もは  
じまり、秋も深まるころ、い  
つものように人文学部報の二  
七号が発行できました。人文  
学部報が一九九四年十月に創  
刊されて十三年が経過しま  
す。その間、学部の教員や学  
生たちの活動や教育、研究な  
どの一部を、学内外で紹介す  
るといふ役割を果たしてきま  
した。毎号、すべてを紹介し  
きれないのが残念です。

(編集委員長 小出 良幸)